

尊者・福者に「奇跡」の取次ぎを願うときの要点

■取次ぎを願う「尊者・福者」を決めること

尊者や福者の取次ぎを願うとき、「あの方にも、この方にも」と祈ってしまうと、「しるし」なる奇跡が与えられた場合に、どなたが取り次いでくださったのかわからなくなってしまいます。ですから、いつも特定の尊者か福者を念頭において、取次ぎを願いましょう。

■複数の福者を含むグループの取次ぎを願うとき

「ペトロ岐部と187殉教者」のように複数の場合は、その中の一人か一部の福者の名で、取次ぎを願うと、「しるし」(奇跡)が証明されたとき、その福者しか、列聖されません。ですから、いつも、グループ全体の取次ぎを意図してお祈りしましょう。

詳しくは、以下を参考にしてください。

列福・列聖と信仰生活

教皇フランシスコは、2018年3月19日付けの使徒的勧告「喜びに喜べ」(Gaudete et Exsultate)の中で、すべての信者は、聖性への道に招かれていると述べました。聖性とは、神との一致です。私たちが目指しているのは、神との一致です。それは、イエスの姿に似ることであると言えます。

聖性の道を歩むには、イエスのイメージはもとより、イエスに従う先輩たちの姿のイメージが不可欠です。人は、具体的なイメージなしに人も自分も愛することは困難です。聖人たちは、まさにそのイメージです。わたしたちは、先輩たちの姿を見ることによって、イエスの弟子の姿、生き方を理解できます。

また、教皇ベネディクト十六世によれば、聖人は、聖書に関する最高の注解書です。実際に、みことばを忠実に生ききった人がいて初めて、聖書を受け入れることができます。

このように聖人とは、信仰の模範として教会が太鼓判を押した人です。平たく言えば、聖人は、身近に感じられる信仰の友、安心して頼れる先輩です。りっぱな信仰と陶冶された人格を兼ね備えた人が聖人というわけではありません。その人が、イエスを指し示し、信仰の模範となり、その人に祈って欲しいと神の民が望む人が、列聖されます。

だから列聖と叙位叙勲とは、決定的に異なります。ある人の社会貢献を国家が公式に認定し、国家

が栄典を贈る叙位叙勲と列聖は、一見、似ているようでいて、まったく異なります。叙位叙勲は、社会に対する貢献を国が公式に認定し、公的な栄典を贈る制度です。その人格は問われません。それに対して、列聖は、その人を信仰の模範としたいという神の民の声と望み（声望=fama）を教会が公に認証し保証することです。聖人たちは、三つに大別されます。

1. 殉教者 (martyr:あかし人)

信仰の神髄は、理性で理解できるものではありません。信仰の本質は、思想体系とは別のところにあります。合理的で完璧な論理体系だから信仰が伝わるわけではありません。喜びのあかしによって伝わります。あかしには、いろいろあります。そのあかしの仕方によって、列聖の道も異なります。具体的に言えば、殉教者、証聖者、愛のために隣人にいのちを捧げた人、以上三つの種類があります。いずれも生涯かけて神の愛が真正であることをあかししています。そのあかしのおかげで、キリスト者は、どんなに不条理な目に遭ったとしても、安心して、神に信頼して生きることができます。

それらの中で、もっとも力あるあかしは、いのちがけのあかしです。教会は、こうしたあかし人を殉教者と呼び、その生き方に倣うように奨めます。教会が殉教と認めるあかしは、つぎの三点を満たしています。

第一は、迫害によって実際に殺害されるか、殺害を視野に入れた拷問や投獄などによる死です。右近の直接の死因は病気であり、実際に殺されたわけではありません。しかし外国への追放処分は、明らかに死を意図しており、殺害に等しいのです。

第二は、迫害の意図がキリスト教の信仰と道徳への憎悪と反感であることです。迫害者の意図が、政治的な対立や権力闘争などの場合、それに反対する被迫害者の姿勢がたとえ正しくても、信仰のあかしとはみなされないのです。

第三は、迫害を耐える側の動機です。信仰のあかしだけを意図し、結果としていのちを差し出す死です。英雄願望、権力への反感、政治的な主張を動機とする死は、闘争です。それは殉教とは言えません。また殉教はあかしですから、完全な自由意志によるはずで、強制された証言は、あかしとは認められません。そして愛は、自由意志から生まれます。さらに殉教は、完全な非暴力でなければなりません。敵をも愛するイエスの姿（ルカ 23.34）に倣うのです。

一見、悲惨にさえ見えるいのちがけのあかしは、その恐ろしい憎しみと肉体の苦痛にも関わらず、大きな慰めと喜びに満たされていたことが報告されています。パウロは、マケドニアの信徒について、つぎのように述べています。「彼らは苦しみによる激しい試練を受けていたのに、その満ち満ちた喜びと極度の貧しさがあふれ出て、人に惜しまず施す豊かさとなったということです」(コリント二 8.2)。「最高法院の議員たちは、使徒たちを呼び入れて鞭で打ち、イエスの名によって話してはならないと命じたうえ、釈放した。それで使徒たちは、イエスの名のために辱めを受けるほどの者にされたことを喜び、最高法院から出て行った」(使徒 5.40-41)。満ちあふれるその喜びとは、キリストの復活に与る者にされたことから生まれます。殉教者は、苦しみを耐え抜いた強い英雄としてよりも、むしろ、人びとの憎悪と遺棄の恐ろしい苦しみの中にさえ、最高の喜びに満たされることを証明した人として、わたしたちの励みになります。

2. 証聖者 (confessor: 告白者、賛美者)

生涯をかけて信仰の喜びを告白し、神のみわざを賛美した人は、数多くいます。教会は、こうした人びとを証聖者として崇敬してきました。現代に生きた良い例として、コルコタの聖テレサ（マザー・テレサ）を挙げるすることができます。

3. 列聖への第三の道 (tertia via ad canonizatione)

教皇フランシスコが、2017年7月11日の自発教令‘Maiorem Hac Dilectionem’によって、列聖の第三の道が開かれました。隣人への愛のために自己のいのちを捧げ、そこに深い喜びを見いだした人びとです。

その例は、聖マクシミリアノ・マリア・コルベ神父です。ただしその列聖当時は、この制度がなかったため、殉教者に認定されました。コルベ師は、信仰への憎悪というより、些細な理由で銃殺されそうになった名も知らぬ隣人のためにいのちを捧げました。見知らぬユダヤ人の身代わりを名乗り出て殺されたのです。「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない」(ヨハネ 15.13)とのイエスのことばを実践しました。

列聖・列福につながる、尊者・福者の取り次ぎ（奇跡）を願う時は

日本のカトリック教会は、多くの殉教者の歴史を持っています。そのあかしの歴史は、わたしたち現代の信徒にとっては、何ものにも代えがたい貴重な宝であり、一人一人の殉教者の生き方は世界の人々に知っていただく価値のあるものです。

■尊者・福者・聖人

尊者(venerable): 教皇庁列聖省が、列聖を申請する教区から提出された調査書を審査し、その内容を承認すると尊者と呼ばれるようになります。証聖者である尊者の列福には、その取り次ぎの確かさを示す奇跡が、一つ必要です。尊者は、公の典礼で記念されることはありません。

福者(blessed): 殉教者として列聖申請されている場合は、その死が殉教として聖座に承認されると福者になります。証聖者として列聖申請されている場合は、特筆すべき聖徳が認定され、その取り次ぎの確かさを示す奇跡が一つ、聖座に認められると福者になります。その福者が属した国で、公の典礼の場で記念され、聖像やご絵の制作、墓参が、ゆるされます。

聖人 (saint): 殉教者を含め、福者を聖人に認定するためには、その取り次ぎの確かさを示す奇跡が、もう一つ必要です。聖人は、全世界で崇敬され、その信仰のあかしを全世界に知らせるよう奨励されます。

■奇跡の必要性

「奇跡」は、単なる「不思議なできごと」ではありません。尊者や福者がすでに神とともにあり、わたしたちが特定の尊者や福者に神への取り次ぎを願うとき、神が、その取り次ぎに耳を傾けてくださったことの「しるし」です。ですから、わたしたちは尊者または福者に対する崇敬の念を込めて、神への取り次ぎをお願いします。

■取り次ぎの願いは、列聖・列福を願う対象者に絞る

尊者や福者の取り次ぎを願うとき、「あの方にも、この方にも」と祈ってしまうと、「しるし」が与えられた場合に、どなたが取り次いでくださったのかわからなくなってしまいます。ですから、いつも特定の尊者か福者を念頭において、取り次ぎを願いましょう。

■複数のグループの取り次ぎを願うとき

「ペトロ岐部と 187 殉教者」のように複数の場合は、その中の一人か一部の福者の名で、取り次ぎを

願うと、「しるし」(奇跡)が証明されたとき、その福者しか、列聖されません。ですから、いつも、グループ全体の取り次ぎを意図してお祈りしましょう。

■列福・列聖の手続きのための記録

奇跡の審査は、客観的な事実とその記録に基づいて行われます。生命に係わる重篤な病気や、治らないと思われた病気の回復のために、取り次ぎをお願いする時、以下の点を記録するようお願いいたします。記憶だけに頼らず、たとえばメモに残すと証言の時、役立ちます。

1. 取り次ぎの祈りは:

- a. どの方(たち)に、いつからいつまで(期間)、どのような祈りをしたか。
- b. どの祈りを何回したか、
という記録が必要になります。

2. 治癒に至る記録の保存

医学的な奇跡の認定のためには、以下の4点が審査されます。審査のためには、医学的な記録が欠かせません。

- ① すぐに治った
- ② 完全に治った
- ③ その回復の状態が長く続いている
- ④ その回復は、医学的な説明が不可能

■奇跡と思われる事例の報告

いのちに係わる病気や難病、障がいなどが奇跡的に完治したと思われる事例があれば、遠慮なく当列聖推進委員会にお知らせください。

お知らせは、事務局宛ての文書でよろしいのですが、電話でお気軽にお知らせいただいても結構です。

列聖推進委員会は、お寄せいただいた情報をもとに、極秘のうちに必要な資料を集め、医学的、神学的観点から報告書を作成し、教皇庁列聖省に送ります。奇跡かどうかを判断するのは列聖省です。世界中から多くの申請が集まるので、調査には、それなりの日数を要します。

これらのことを心にとめて日々お祈りくださるよう、謹んでお願いいたします。

日本カトリック司教協議会列聖推進委員会
〒135-8585 東京都江東区潮見 2-10-10
日本カトリック会館
電話: 03-5632-4445
e-mail: gensec@cbej.catholic.jp